



理事長あいさつ

特定非営利活動法人 福祉オンブズおかやま
理事長 高崎 和美

福祉オンブズおかやまの活動に参加・ご協力ありがとうございます。新しい年度が始まりました。身近な方が介護保険サービスを使い始めたという方も多いのではないのでしょうか。

成年後見制度と介護保険制度が同時にスタートして 20 年余。実践は積み重なってきていますし、後見人と福祉・医療が連携したすばらしい取り組みもあります。しかし、本当に介護で切実に困っている人にまで恩恵は届いているのでしょうか。

介護保険サービスを利用せず、ストーマ（人工肛門）を付けた後期高齢者の母を 24 年間自宅で介護した方の話を聞いたのは、わずか 2 年前。娘である彼女が同居していることでヘルパーは使えず、ストーマがあることでデイサービスも断られ、本人の年金は月 4 万円ほどしかなくて入所施設に入れる金もなく、最後まで自宅で介護したとのことでした。親を最期まで看ることができたことの誇りと充実感をもっておられたけれど、「私は 24 年間他のことは何も出来なかった」と言われました。地域包括ケアシステムは機能してたのだろうか？との思いがわいてきました。これだけ介護保険サービス利用が広がった 20 年間での話だったのでショックでした。

地域・担当者による行政の温度差、事業者の存在の偏り、提供されるサービスの幅の狭さ（同居者がいたら共用部分の清掃ダメ、病院の通院付き添いに介護保険が使えないなど）、サービス提供者が本人ファーストに徹しているかどうか、さらに自己負担の問題も実は大きいですね。

4 月に入って、私自身が担当している後見事案でのサービス担当者会議。介護内容の情報交換はすばらしかったのですが、最後は「報酬加算」のオンパレードでした。「個別機能訓練加算」というのは、単に運動しましょう、ではなくて日常生活の動作を目標にしてそれに向かって個別の訓練をしていくもの、科学的介護推進体制加算は、データをとって「科学的な介護を推進するため」のものなどなど。報酬が加算されれば自己負担が増えていきます。利用者からすると、この細かい加算は一体何なんだろうか、実は私もまだよくわかりません。

介護保険制度の構造と現状（特に在宅）について、改めてちゃんと勉強してみるべき時が来ているのかもしれない。

オンブズ活動は、市民の体験と声が命。新型コロナの影響で総会は昨年同様、書面決議およびオンライン会議併用になりそうですが、皆様も、最近気になったこと、興味を持ったこと、問題を感じたことなど、ぜひお寄せください。

『私の歩んだ道 — 見えないから見えたもの』

講師：竹内 昌彦 先生
(認定 NPO 法人 ヒカリカナタ基金理事長)

3月7日にゆうあいセンターにて、人権・福祉講座が行われました。今回の講座は、『私の歩んだ道 — 見えないから見えたもの』と題し、認定 NPO 法人 ヒカリカナタ基金理事長の竹内昌彦先生からお話しをいただきました。

昨年5月に行われた第7回定時総会の記念講演のため準備いただいていましたが、コロナ感染症拡大によって中止にせざるをえませんでした。今回、感染対策を講じながら対面形式で講演を行うことができました。コロナ禍において、元気を失いかけるときだからこそ、竹内先生の言葉から、たくましく生きる意味を学びなおす機会となりました。

以下に今回の2020年度人権・福祉講座の内容を要約にてご報告いたします。

- ・おはようございます。私の身長は178センチあったけど最近縮んでしまいました。けど、これは「高いうち」で、「たけえうち」の竹内です！
- ・私はずっと教員をしてきました。目が見えない、全く見えない人生を70年・・・この経験の話ならできると思って喜んで来ました。皆さんの期待にそえるかどうかは自信がない。一生懸命自分のことを言うしかない。その中から皆さんの仕事に役に立つことがあればいい。
- ・最初に、目が見えないという障害について分かってほしいと思う。障害を理解するというのは本当に難しいですよ。おそらく、今、皆さんが目をつぶると何もできない・・・、これをもって「目が見えない人は何もできない」と、こういうふうに決めてしまう人が多い。
- ・これでもって、目が見えない人は、仕事もできないだろう、生活も困るだろう、と（思われることで）。逆に私たちの仕事や生活が制限されて困ることがある。
- ・けど、人間は目玉が壊れたくらいでは、そう諦めなくていいですよ。目が見えなくても、顔も洗うし、このネクタイも締めれるしね。慣れれば、毎日の生活でそう困ることはない。食事で困ってたら、（体は）こんなに大きくなる。だいたいご飯を目で食べてる人を見たことがない。この口がよく入るんですわ！それで腹が出る。（笑）耳の掃除なんか、目が見えなくてもできるでしょう。だからね、人間、慣れればできることが多いんですよ。それをわかってもらいたい。
- ・だけどね。どうしても慣れるまでに時間があるんですよ。皆さんははじめからパーッとできる。我々はそれをするのに時間がかかる。

ここを分かっというてもらいたい。

・皆さんの周りに障害者、高齢者、子どもといるでしょうが、何をするにも時間がかかる。そういうときに、イライラせずに待っている。その人が分かるまで、できるまで待つほしい。・・・岡山の間はイラが多いですよ。「はよ。いかれえ。さっさとせられえ。」というし、「はようシネエ」とか、よその人（県外の人）が聞いたらびっくりする！

・私の付けている腕時計・・・これガラスの蓋が開きます。蓋を開けると針がある。手で触ると・・・えーっと10時と9分ですか？（実際の時間）電気を灯けなくても読める。指で読むのは難しい人にはしゃべる時計がある。時計：「只今より、10時10分をお知らせします。」

・万歩計もしゃべる。

万歩計「ろくせんよんひゃくろくじゅういっぽ（6461歩）」

・こういうものを我々はあちこちで見つけてくるわけですよ。

・我々は点字を使う。指でこうやってね。これもよくあちこちに付いています。缶ビールを飲むときに、皆さんよく見てください。缶のプルタブの脇に点字で「おさけ」と書いてある。アルコールかどうかわかるようになってる。これお家にありますか？（ゆかりの袋を取り出す）一番上のところに点字で「ゆかり」と書いてある。広島の上島食品よくやってくれますよ。ぼくらが子どものころには考えられなかったような優しさがある。

・それでもお願いがあって、どうしようかと思うんですけど、いつもこういう場では2つお願いするんです。1つは、点字ブロックなどの上に自転車などを置かないでください。点字ブロックは、岡山が世界で最初の場所なんです！この近くに住んでおられた三宅精一という人が初めて作って、原尾島交差点に1967年に設置した。それが世界に広がった。福祉の道具、車いすも、補聴器も、眼鏡も、みな外国で生まれて日本に来た。日本で生まれて世界に出ていった福祉ってね、点字ブロックくらいのもですよ。そのことを岡山の人が知らないの、11年前に原尾島交差点に「点字ブロック発祥の地」の石碑を建てた。友達やみんなが建てようということになって、お金を集めて、半年間であつという間にできた。近くにきたら、ぜひ見ていただきたい。大きなのが3つも建っている。

・その石碑を建てたことで、「点字ブロックの歌」ができるわね、「記念日」ができた。3月18日なんですけど・・・もうすぐなんですよ。ね。（講座の日が3月7日）ステッカーはできるし、マモちゃんというキャラもできるし。ラジオ番組もやってます。毎週金曜日16時40分から・・・RSKで10分間・・・視覚障害者向けの番組をやっております。

※ RSK ラジオ「みんなで守ろう黄色い道～岡山 発 マモちゃんラジオ」毎週金曜日

16時40分～16時50分

・なんでそんなに頑張るかということ、点字ブロックの上に自転車が置いてある。やっぱり分かってもらえていない。確かに（点字ブロックは）車いすの人には邪魔だと思いません。キャリングケースの人にも邪魔かとは思いますが、でもあれがないと命に係わる。本当に困

る人がいることを、分かってお互いに分かって、許しあい、認め合える社会が本当の共生社会です。

・今は保育園が隣にあったら「やかましい」から「あっち行け」とかね、「除夜の鐘を夜に鳴らすとやかましいから昼鳴らせ」とかね。自分の都合だけ言って、自分の主張をするだけの人が多い・・・オンブズマンとは、基本的には「代理人」という意味です。いろんな相談があるんでしょうけど、個人のエゴか、正当な訴えかを見極めるのは大変と思うけど、私は、認め合える、許しあえる社会になってほしい。

・2つ目のお願いが、「見えない人が困ったら声をかけてもらいたい。」声は、かけにくいらしい。でも目の悪い人は悪いことしませんからね、安心して声をかけてもらいたい。「何かお手伝いできることはありませんか」と声をかけてくれたら、どんなに有難いか！もし知り合いだったら、名前も呼んでももらいたい。「声でわかるか？」と言われますが難しいですよ。とくに女の方は、いろいろな声がある。場面で声が違う。女房は、外からの電話に、「どちら様ですか」と優しい声、自分の子どもとわかったらとたんに「こりゃあ!!! (大声)」全然違う。(笑)

・我々はこんな物を持っている。白い杖・・・白杖（はくじょう）を持っている。こういう人がいたら、（信号が赤信号だったら）「まだ赤ですよ」とか教えてほしい。信号の音には決まりがあるのをご存じですかね？

・カッコー、カッコーと鳴るのは、東西方向が青。ピヨピヨがなると南北方向が青の意味

なんですよ。全国共通でそう決まってる。目が見えないところで、危ないことしとっても、日本人は黙ってるんですよ。そういうとき、「何かできることありますか。」と声を掛けてほしい、近くなら連れて行ってほしい。

・どうやって連れて行ったらいいかわからん、それもそうですね。これは誠に簡単なんですね・・・はい、ここへ来てやってもらったら、よう分かりましょう！（演台から前に歩き出す）

・（受講者の一人が、竹内先生のそばに寄る。受講者に対して竹内先生から声かけられる）「どうぞこの右手につかまりください。」って言ってください。（右手につかまる）これだけでもういい！これで歩いてください。（3歩前進する）こうやって手を引くから「手引き」という。

・悪い例はこれ（後ろから肘のあたりをつかんで押す）。これでは怖いです。これで旭川に突き落とされたら、それで「さようなら」になってしまう。

・結局なんで右側なんかというと、普通、道路は歩行者は右側通行なんで、車がやってきて（車に）飛ばされるのは介助している人、私は助かるんです(笑)これがいいんです(笑)

・じゃあ、（協力者に）記念品をあげます。これ分かります？（ピンポン玉を取り出して）ピンポン玉だけど音がする。我々は目が見えなくても卓球をします。これを転がして卓球するんです。目が見えなくても卓球ができる。僕は大阪大会で優勝した。これをあげます！

・それからまだある！3月18日が点字ブロックの日で、いつも行事をするんですけど、日曜日にやってくれと言うことで、今年は3月28日（日）に岡山駅でティッシュを配る・・・そのあと未来の点字ブロックとか、シンポジウムを国際交流センターでします。そのときに配ろうと思っていたティッシュを早めにあげます！

（拍手）

・私の生い立ちの話をする中で、聞いてほしいことはいっぱいあります。私は、自分の人生を考えてみて、とても悲しいことが2つあったと思うんですよ。

・1つは目が見えなくなったことですわ。やっぱり残念でした。もうひとつはもっと悲しいことでした。初めて生まれてきた男の子に重い障害があった。そしてその子が7歳で天に召された。親として、こんなに悲しいことはなかった。

・一方、それをうめて余りある幸運もあったんですよ。一つは、とてもいい親だった。子どもにとっていい親のところに生まれるかは、100%運です。生まれてきて「この親はまずい」と言ってもどうしようもない。

・だけど、私は本当にいい親だった。2つ目は、いい教師に出会えた。それも複数ね・・・3つ目は、今、素晴らしい家族と仲間と囲まれている。

・私は昭和20年2月17日に生まれた・・・このあいだ誕生日でした。中国の天津で生まれた。父が向こうに仕事があってね。戦争に負

けて引き揚げてきたけど、赤ちゃんの私は引き上げ船の中で肺炎になり、40度を超える熱・・・薬も食べ物もなかった。そのときの熱が右目を破壊してしまった。左の目もちょっとは見えていたのだけど、その目もやがてダメになりました。

・はじめは見えとったんで、石井小学校へ行った。あのころ子どもが多くて1クラス60人ですよ。あのころは60人で教室はいっぱい、黒板が遠い、先生の書く字は見えない。今でこそ障害者を大切に、と言うけど、そのころ障害者は人間扱いでなかったですよ。

・目の不自由な私はずいぶんひどい目にあいました。（周りの友達が）鬼ごっこするといつても「入れてやらん」と言うしね。なんもしてないのに、机の上の僕の鉛筆をはね飛ばすのがいるし。給食のミルクにゴミ入れるのがおるし。やはり腹が立った。

・学校に行くのが嫌になった。けど行く。行かなんだら親が心配すると思った。幼稚園の時に病院で一生目が治らんと言われたときね、母親がずいぶん泣いたですよ。あれ以上心配をかけさせたくない。だから行った。

・だけど腹が立ってね、だから、教室の消火器をぶっ倒してやった。消火器から泡が出ましよう。それをワルの頭からかけた。泡食って逃げよった。でも消火器は一度出たら止められないね。そこら中ビシャビシャ、そのあと勉強を止めてみんなで拭き掃除。それは効き目があってね。それ以来、なんかあつたらすぐ消火器のところへ行くからね。あれは抑止力になった。

・学校の帰りに石を投げてるんですよ。そんな時代ですよ。そりゃあ腹が立った。どうしようかと考えた。帰り道に空き缶があった。それをもって学校へ戻った、空き缶に砂場の砂を入れた。それを持って、ワルの家に行って、玄関から、その家の座敷に、砂をぶわさーっと投げてやった。いろいろ研究したけど、砂がよろしい。中のおばさんが飛んできて、「あんた、なにしょんでえ！」と怒った。それで「あんたとこの子が、ぼくにめくら言うたけん。砂投げた。」と言ってやった。そしたらそのおばさんは私を怒る前にワルを連れてきて、「あんたはこの子になにをしたんでえ。お母さんの前でちゃんと謝りなさい。」と。昔の母親は、今のお母さんのように大学行ったなんて言う学歴はなかったけど、でも自分の子どもの非を認め、その子を叱りしつける力はあった。

・私はこんな話を学校に行ってる。なんでするかというと、今学校の一番の課題はいじめ。いじめが原因で首を吊ったとか、電車で飛び込んだとか。そんな話をたくさん聞くと思ってますよ。自分もつらかったろうと・・・だけど、「なんで死ぬんかな」と思う。腹が立つ。自分の命を自分だけのものだけと思ってるんじゃないかと思う。

・これは大間違い。みんなの親は、今すぐこの場所でもね、自分の子どもを助ける代わりに死ぬ言われたら死ぬ。親はそう思ってるみんなを大きくしている。みんなの体の中には、お父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃんの命も入ってる。それなのに自分だけが死ぬかい？親は生きる元気も希望もみな失うぞ。みんなは元気に大きくなりようから気が付かん。私は子どものころから目が全然見

えなくなり、その前で親がどんなに悲しんでいったか。それでも一生懸命大きくしていったか。それを見てきたから、それで気が付いた。気が付いたからみんなに話しをする。「絶対に死ぬな。」「死ぬほどつらいときがあったら、竹内流にやれ」、「自分がこんなに腹が立つって形に出せ。」「出せなんたら親か誰か、言える人に言え。言えなんたら、紙に書いて出せ。」「自分一人の中に閉じ込めず、みんなの問題にすること」大勢に知らせるのが大事ぞ！それを知らせて回ってみんなの問題にしろ。

・何ならいじめっ子にも言いたい。どうせやるなら弱い子を助ける側に回ってみい。気分がいいぞ！

・つらい時があったら、逃げてもいいから。夜があっても朝が来る。つらいときは逃げ出せ。死ぬなって言ってきたんですよ。

・そんなつらいクラスが（小学校）2年になったとたんに、いいクラスになった。それは、教師になって気づいたけど、2年生の担任、島村清という人が立派でした。私の目が見えないということを4月の最初の日に、子どもたち全員にきちっと知らせた。目の弱い竹内をどうやって助けられるかとみんなで考えようという提案だった。どこに座ってもらおうかと先生が言うと、みんなが「一番前の真ん中に座ってもらおう」と言ってくれたんです。

・先生はいつも大きな字を書ってくれたんです。「この字は読めるか？」「数字は読めるか？」それを子どもたちの前で見せるんですよ。「竹内は大きい字を書いたらよめるんじゃない、わしも読めるぞ、ちょうどいい」そういう雰囲気

にしていったからでしょうね。

・私の右に座っていた女の子が、これが世話焼きで、ちょっとうるさい。私のノートをのぞき込んで、字のここは跳ねとる、とか、やかましい。(笑) その女の子を島村先生がものすごくほめる。先生が褒めると、そうすると2年生くらいの生徒はかわいい。授業が終わったら、友達が3人も4人も私の所へ来て、「わしのノートを見てみい」「わしの字の方がきれい」「そっちは線が薄い」・・・競争です、竹内に親切にすると先生に褒められる、ということ。何が人として大切なことかを、先生に教えていただいた。

・そんないいクラスだったけど、2年生の2月10日、網膜剥離を起こしていっぺんに見えなくなった。

・多くの親は障害児を隠そうとするものだったけど私の親はね、「目が見えなくても教えてくれる盲学校がある。お母ちゃんが送り迎えをしてあげる!」「盲学校へ行こう。盲学校で一番になろう」と言ってくれた。だから今の私があると思うんですよ。

・今でも盲学校にテレビの取材が来たら「うちの子は写さんでくれ」という親がいる。私は現役時代に、そういう親に怒った、世界中の人が(この子は)目が見えんと言っても、この子は目が見えなくても一生懸命生きていこうとしているんじゃないかと言うてやるのが親なのに、その親までうちの子の存在は恥ずかしいと言うのでは、子どもはどれだけ力を失うか・・・。

・盲学校はよかったです。いじめはなかった

し・・・よう遊んで。でも成績は悪かった。成績は後ろから1だったけど。成績がよくなったのは中学1年生から。ここでも素晴らしい先生に出会えた。担任は中原玲子という地理の先生だった。目が見えない子に地図を教えるのは難しいですよ。一人ずつ手を取って丁寧に教えてくれたから、よう分かる。

・分かれば面白い。前の晩に教科書を読んでいくようになった。予習をしていく。子どもらに言うんですよ。「前の日の晩に教科書を必ず読め。」「声に出して読め。」わからん言葉や単語を調べていくだけでも、先生の声がよく聞こえるようになって、気分がええぞ。

・これで授業が面白くなり、成績が上がり、中学1年の最後には成績は全部(5段階評価の)5になった。中原先生はね、最後に私に言ったのは、「竹内君の5は本物ではない。あなたは自分だけが良くなればいいと思っていない? クラスに勉強の苦手な子がいる。その子たちに親切に、丁寧に教えてあげれたとき、あなたの5は本物の5になる。100点をとっても、みんなのために使えない100点には意味はない。来年は、私が言う本物の5にしてください私はいつまでもあなたのことを見ていますよ。」と言われた。

・大事なことを言われたんですよ。何のために学ぶかを考えろ、と。あとから分かったんですけどね。でも言われたことは覚えています。中学時代は勉強を頑張った。目の見える奴に負けるか、と思ってね。それが、中学3年のとき、がっくりきた。

・目が見える友達好きな高校を選べるのに、盲学校には、あんま・鍼灸しかなかった。私

はあんまさんは嫌でした。本当は目が見えたらね・・・私は絵が得意だったんですよ・・・1年生の時に書いた絵も入選して天満屋に貼ってもらったもんね。

・だけど、目が見えないからその道は諦めないとはいけなかった。設計図を書きたかった。自分の家は設計したけど、それだけでした・・・

・1つ上の兄は、勉強はせんかったけど、勉強がようできた。岡山の中の難しい高校に楽に進学していくし、そりゃあ嬉しそうでした。近所の人々が祝いをくれるし、家具屋さんが兄のためにこんな大きな机を運んできてね。ピカピカの学生帽を被って、新しい自転車で颯爽と高校に通う兄。羨ましかった。初めて、目が見える人を羨ましいと思った。

・それに比べて弟は目が見えんで、お金ばかりかかって、将来大したものにはなれん・・・この竹内の家にこんな子どもがいるから、この家には幸せが来ない。私さえいなければ幸せが来る。15歳の結論はそうでした。だからなんどかね、あそこにある（岡山市）岩田町の踏切・・・今は地下道になってるけどあそこは踏切だった。あの踏切まで何度かあそこまで行ってみた・・・。けど飛び込めなかった。それは、こんな私をエリートの兄と同じ、またはそれ以上に大切に育ててくれた。その親を悲しませることはできなかった。

・でも高校時代は勉強を投げたねえ。あほらしゅうてやってられるかぁ・・・。そんな私が立ち直れたのは高校2年の夏休みだった。これは単純な話だったんですけどね。近所のおばさんが、肩が痛いからぼくにあんまをしてくれと。今思うとあれは五十肩ですな。仕

方ない20分くらいしてやった。終わった後、暑いし、汗がでるし、そしたら、おばさんが戻ってきて、「ぼく～」と呼ぶ。「どうしたんでえ？」と聞いたら。大きなスイカを2つも持ってきた。肩が楽になったって言うんですよ。「どこの病院に行っても一つも効かんかったのに、あんたのあんまは気持ちがあえわ、手は動くわ、あんた学校でええことを教えてもらってるな、ありがとう！」と何度も言って帰った。

・私はあんまを馬鹿にしていた。あんなもの何の役に立とうか。それが、大人があんなに喜んでね。ぐずぐず言わずに一発やったろうかと思った。教科書を全部読むようになった。二学期になって先生に呼ばれてね。「お前、今頃、本気に勉強するようになったな。」成績がどんどん上がりよう。「本気を出しとんなら、ちょっと難しいけど、大学に行って教員になる道がある。お母さんも希望されていた。わしも応援するがやるか??」と言われてね。それで挑戦して教師になったんです。

・今考えたら、おばさんの肩は、私が直したのではない。そんなはずがない。あれは丁度治るときだったんです。けど結果的には、それがよかったんですよねえ。

・さっきも話したけど、私はいい親を持った。あの親はね、私をどこにでも連れて行った。お祭りでも、サーカスでも、動物園でも、博覧会でも、どこでも連れて行った。牧場で馬に乗った。象にも乗った。サーカスではニシキヘビのシッポもひっぱたい。父親は毎晩本を読んでくれた。今日は、鞍馬天狗、西遊記、ソロモンの洞窟、紅ハコベ、みんな面白かった。だから本が好きになった。

・父は疲れているだろうけど、私を外へ引っ張り出した。目が見えん分、体は丈夫に作ろう！夏は旭川の水泳ですよ、あの頃は泳いでよかったから。盲学校に行ったら誰も泳げない。私だけ泳げた。この辺の山は全部登りました。うれしかったのは昭和39年の東京オリンピックとパラリンピック。パラリンピックはその時で2回目だった。その時から目が見えない人もパラリンピックという時代が来た。それで私は行かせてもらった。

・卓球で金メダルをもらってきました。でもね、そんなメダルより嬉しかったのは、パラリンピックに出発する日です。夜行列車で出発するとき。夜中でしたが大勢見送りに来てくれた。その中に父と母もいた。父は無口で、大人しくて、何も言わないんです。

・その父親が、列車が動き出したときに、父が、「たけうちまさひこばんざーい！」と3回も叫んだ。あの当時、19歳の私でしたが、その父がどんな思いで叫んだか、痛いほど分かった。

・8歳で目が見えなくなった子だけど、時間の許す限り、腕によりをかけてこの子を育てた。その子がいつもの間にか、自分より大きくなって、今こんなにも大勢の人に見送られて東京へ行く。この目の見えない子をわしがここまで大きくした。この子を育ててよかった。あれこそね、重い障害を持って生まれた子の、父親の子育ての勝利宣言以外の何物でもないんです。

・父さんのおかげでこんないい体ももらって東京へ行ける。ありがとう！と、下を向いてつぶやくのがやっとでした。こんないい親を

持ったんだから、だからそれ以後ね、なんかあってもあの親を喜ばしてやろう、安心させてやろうと、それが生きていく原動力だったのは確かです。

・障害者の定義は、今までは本人の能力の問題だった。今の国連の定義はね、社会に問題があるということになっている。社会が障害を多くしている・・・どうということか。

・例えば、目が見えない私たちが家を借りようとする・・・、私も結婚した53年前、やっぱり家を貸してもらえなかった。だから、貧乏でも無理やりちっぽけな家を建てたんですよ。

・「火事を出すから家を貸さん」と、今でも言われますよ。でも皆さん、火事のニュースを見てください。たいがい、目が見える人が火を出している。我々は、逃げるのが大変なんで、慎重に火を使うんですよ。だけど、家を貸してくれない人が多いんですよ。

・盲導犬であってもレストランに入れません・・・今は「身体障害者補助犬法」という法律があることが分かっているけど、法律はわかっているけど、わしは入れん、と堂々と言う店主がいる。「入れん」という。しかもそれを行政は、指導しきれません。

・生命保険にも制限がある。若い頃に保険会社の人にどう言われたかというね・・・「竹内さんは3000万円までしか入れません。目が見えない人は死にやすいから。」保険会社が儲かりません。そんなデータがあるんか、と言ったら、「あります」というから「見せてもらおうじゃないか」、そこの支店長は本気になって、東京の厚生省に探しに行っ

てきたから、「あったか？」と聞いたら「ありませんでした」と。当たり前じゃあ！ほんなら5000万円でも、1億でもかけるでえ、と言ったら、3000万円です、と。科学的なデータがないのに、目の見えない人は3000万円までと。そういうのはな、「言われなき差別」って、今時流行らんで、そんな会社は今に潰れるで、と言ったら、ほんとに潰れた。

・テレビでもどうです。ニュースとかで、外国人が話すときに字幕がないと皆困るでしょ。消したら日本中怒ると思いませんか？私たちは、あの字幕が読めんから、それと一緒にです。だから字が出るんなら、声も出してほしいと、いくらお願いしても聞いてくれん。こういうことは人間の努力で解決できることばかりなんだけど。

・他にもいろいろありますよ。身体障害者の扶養共済制度。これは国がやってる制度ですよ。でも悪徳商法ですよ。私の学校の後輩が、障がい重いから、その親が年金が将来出るようにって、(掛け金を) 毎月に2千円かけた。

・それがちょっとしたら、4千円に掛け金が上がった。それが8千円になって、1万円を超えて、毎月ですよ。とうとうついていけなくなったから止めたら、そっちの勝手な理由で止めたら、今まで掛けた100万円以上の掛け金は返さないという。これは悪徳商法でしょう！そういうことが放置されているんです。

・公民館にはこういうルールがあるのはご存じ？大学の先生は講師料が2万円、学校の先生1万円、一般の人5千円って決めてある。これは職業差別でしょ。だって、癌の研究の

教授と助手の間に差があるのは分かる。だけど山登りのテーマで講演するときに、大学の教授だったら2万円、一般の人だったら5千円・・・山登りの話に職業って関係あるかな。だけど、そういうのは今でも公民館や学校にありますよ。職業差別だと思うけど、人権擁護委員会に聞いてみても「社会通念です」と言う。社会通念に問題があるから言うとのにね。

・私が教員になった頃の社会通念がどうだったかと言えば、「親を扶養するのは長男です。次男が扶養する場合には理由書がいります。」・・・なんでえって言ったら、社会通念ですと。「住宅手当を請求できるのは夫です、家は男が確保するものですから」・・・女性教員が請求したら、いけません、社会通念ですと言われていた。まだそういう時代でしたよ、教員になったばあの昭和43年頃ってね。社会通念で当たり前と思われていることこそ問題があると私は言いたい。

・いくつかまとめを言います。1つ目です。私の長男はお産が難しく、丁度この建物は、以前は国立病院でした。その国立病院で仮死状態で生まれて重い脳性小児麻痺でした。そりゃあ可哀そうでした。どの保育園も預からないという中で、津島にある「あゆみ保育園」の先生だけは違って、「かわいいお子さんですね。一緒に大きくなるうね。」と言ってくれた。

・その保育園を岡山市議会は責めたんですよ。「障害児を保育園に入れるやつがあるか！」と。でも、私は頑張った。当時の岡山市長が「その子を、そこから出したらその子はどうか。岡山市は、今年から障害児保育をする。

その保育園を岡山市は全面的に援助しよう。」
当時は数えるほどしかなかった障害児保育に
踏み切ってくれたんですよ。

・そんな大きな仕事をしたあの子がね・・・7
歳で肺炎を起こして死んでしまった。「お父
ちゃん」とも「お母ちゃん」とも言えずに、
死んだ。人生とはあまりにも不公平ですよ。
あの苦しい酸素テントの中に横たわって、こ
のおやじの顔を見て、全身で喜んで、それが
最期でした・・・。

・だから元気な体をもらったのに首を吊るよ
うな人が許せん。あの戦争（アジア・太平洋
戦争）で何万という若者が、夢も希望もあり、
生きたかったのに死んでいったんですよ。東
日本震災で多くの子どもが死んだ。この平和
な時代に生まれてね。

・もしかして皆さんの中には、友達、親戚に
まで広げたら障害のある子を一生懸命育てて
いる家族もある・・・その家族に優しい目で見
られるような人間になってくれ、いつ誰のと
ころに障害児が生まれるか分からん。その時
に安心して子育てができる社会を作ってい
かんと、みんな困ろうが。

・2つ目は、ありがとうと言われた経験をし
よう。人をいじめることに比べて、人に感謝
された時の方が、自分に希望と自信を付ける
ことができる。そういう経験を、大人は子
どもにさせてやってほしい。

・3つ目は、勉強する意味も考えてもらいた
い。勉強はなんのためって聞いたら、大概の
親は自分のためと答える。人間はなんのため
に勉強をするか、一言で言えば「立派な人に

なるため」です。立派な人は、ここにおられる。
自分を犠牲にしても、周囲の人に喜びや幸
せをあげようとする人たちですよ。自分を役
立てようとする人が立派ですよ。たくさん勉
強して力をつけておかないと、大勢の人を幸
せにできん。

最後に、障害のことです。私のように目が見
えない人は400人に一人、耳が聞こえない
人は400人に一人出る。いろいろな障害の
あるひとは400人に20人くらいは障害者で
すよ。私が目が見えないという人生を引き受
けたから、私のあとに並ぶ399人までは、私
のおかげで目が見える。ちょっと恩着せがま
しいけど、そう考えたら気分がええ。

・今日は障害者のことをのことをお願いし
に来たわけではありません。みんなだって、
周囲に困っている人いっぱいおる。友達が、
あるいは同僚が、しんどそうなにしていたら
「あとかたづけしとくから帰って休んでね」と
言えるような、優しい目と心に向けられる人
が人間として一番賢いひと。

・頭がようても、自分のことしか考えん人は
ようけおる。そういう人は勉強してもらわ
ん方がいいですよ。優しい心の上に学問を伸
ばした時、本当にみんなに喜ばれる。

・中学校の時の中原先生はそれを教えたか
つたんですよ。まずは優しい子供を育てること。
優しい家族で育てること。不運に優しい家庭
ではなかったら、自分が大きくなって子ども
のために優しい家庭を作る。

・自分もなんかせんといけん。そこで考えた
のは、今の生き方でした。外国の目の見えな

い人は本当に困るとる。彼らにあんま鍼灸を教える学校を作ってあげたら生きていけると思ってね。まずモンゴルに作りました。キルギスにもやりました。その中でモンゴルから電話がかかってきた。盲学校で「手術をすれば治る」という子がいる。その代わり、そのために20万円くらいかかるけど、そんなお金はないという。私はすぐに言ったんです。「治してもらえ」、「お金が何とかする。治るのであれば、すぐに治してもらえ」と言った。お金で解決するなら何とかする。その子たちは目が治って、親元から普通の学校に通っていますよ。

・そのとき初めて気づいた。ひょっとして日本と違って、外国にはお金で治る目がいっぱいあるんじゃないかな？キルギスに行ったら

そういう子が10何人いました。

・そこで、ヒカリカナタ基金というのを作ってね、みなさんのお金を預かって、外国に送るようにした。今までに329人！

・この1年は、コロナで私たちは外国に行けない。だけど、お金さえ送れば、ちゃんと向こうのお医者さんがしてくれる。ジャパンハートなどの団体もあって送ってくれる。ネパールに行って、子どもを集めて目の検診をしたら、近視の人に眼鏡をあげるたら「見える見える！」と喜んでくれてね。

・今年の4月からはベトナムへ。1000人の目を治してやろう。天国に行ったら、先に行っている息子に「父さん、ええことしてきたが」とほめてもらえるかなと思うんですよ。

このあと、ヒカリカナタ基金の海外活動の動画をみんなで視聴しました。

コロナ禍の中で、元気をなくしがちな1年でしたが、今回はこのように竹内先生のメッセージをたくさん受け取ることで、いまできることをする決意と何のための学びだったかを思い出すことができました。本当にありがとうございました。

【感想】

感動する話を聞かせていただきました。参加できてよかったです！ありがとうございました。
(受講者1)

人生の生き方を考えさせられました。どんなことがあっても、どこかでいい縁があると思いました。竹内先生の人生の中、通った道を聞かせていただき、本当によかった。

障害者はいつ産まれるか分からない。安心して育てられる時代にしよう。

ありがとうの気持ち、感謝される心大切

自分を犠牲にして周囲に喜びをあげようとする人が立派だなのだと、だから学問が大切
現在の社会で冷たく見える中、教えられた心、行動を学び良かったです。(受講者2)

障がいにかかわらず、みんなが相手を想い募らせる世界ができればと思います。(受講者3)

(文責：高崎 和美、藤井 宏明)

リレーコラム 第21回

今回のリレーコラムは、倉敷医療生協玉島協同病院の清水順子さんです。清水さんは医師として、長年介護を必要とする高齢患者や家族に医師として寄り添ってきました。過去から比べると、確かに現在は多様な介護サービスがあるという点では、少しは良くなっていると思います。ですが、あれほど難産だった介護保険をめぐる高齢者福祉の変遷は、今本当にあるべき姿になっているのか疑問があります。清水医師の温かなまなざしに満ちたコラムをどうぞお読みください。

「高齢社医療 35年・介護保険 20年」

清水 順子さん（倉敷医療生協 玉島協同病院）

高齢者医療や在宅医療、終末期医療に携わって、気がつけば35年。35年前、私が働いていた老人病院（建物はボロボロでも高齢者に適した療養環境、温かい看護介護、入院生活すべてがリハビリという理念の病院）に入院していた人たちは、今ならどこでどうしているだろうとふと思う時があります。

認知症で夕方になると家に帰ると言って看護師さんを困らせていた人たちは、今ならグループホームに入所しているのでしょうか。脳梗塞で寝たきりで意思疎通も困難で経鼻経管栄養して長期入院のMさん、妻と二人暮らしで、短期間だけ自宅退院しました。往診すると、座敷で布団に寝ていて、妻は布おしめを交換しながら、久しぶりに家に帰ったので近所の見舞客が次々に来て疲れたと笑っていました。今なら、介護保険サービスで、介護用ベッド、自動体位変換機能付きエアマット、訪問介護に訪問看護、訪問入浴、時々ショートステイも利用して、もっと長期に自宅で過

ごしているかもしれません。老々介護は大変ですから、胃ろうを造設して特別養護老人ホームに入っているか、年金があったので介護付き有料老人ホームに入っているかもしれません。

全盲で足が不自由で少し認知症のあったIさん。電話は3つのボタンしか押せないけど、それでも一人暮らしできていました。1番はタクシー、2番はヘルパー、3番が病院。それがIさんにとって自分らしく自由に生きていく上で重要な順番でもあり、その思いを皆で支えようとしていた気がします。今だったら、通院しかできない介護タクシーなので買い物にも行けず、ケアプランに従ってヘルパーが来ても短時間に、買い物、炊事、掃除、洗濯とてんでこ舞いで、困りごとをゆっくり話すこともできないので、2番のボタンでヘルパーステーションに電話し続けて、デイサービスを計画しても当日になって行かないと言って、皆から困った利用者と言われて

いるかもしれません。

2000年から始まった介護保険制度は、家族介護から介護を社会全体で支えるしくみだったはずなのに、その後の20年で制度がどんどん変わってしまい、特に住み慣れた家での介護やその人らしい生活をするのが難しくなっています。何度転んでも入院の大嫌いですぐ退院してしまうTさん、寝たきりになってからもヘルパー利用で亡くなる寸前まで一人暮らしができました。車の入らない山の上のOさん、ポータブルトイレに移るのがやっとになってもヘルパーとデイサービスで一人暮らししていて、梅の花が咲いたら家でお茶をするのを楽しみにしていたけど、認知症が進んで妄想で暮らせなくなり、100歳が近くなって特養入所し亡くなりました。

以前の訪問診療は、重介護でも介護保険利

用して一人暮らししている高齢者の自宅に行くこともめずらしくなく、びっくりするような出来事も多かったけど、その人らしい生活が垣間見え、人生を共有しているような気持ちになる訪問診療でした。しかし、5年くらい前からは住宅型有料老人ホームなどの施設への訪問診療が増えています。自宅退院が少し難しいと施設入所が選ばれがちになっています。一番の問題は介護がビジネスとなっていることです。中でも定期巡回ヘルパー制度ができた一方で、ヘルパー制度が短時間で効率を求める内容にどんどん変わっており、その人らしい生活を支えれなくなっています。田舎ではヘルパーを探すことすら困難です。年を取るとゆっくりになっていく高齢者の特性もわからないような厚労省の役人にこのコロナ禍で宴会している間には、ここに来てヘルパーを試してから制度を考えてほしいと言いたいです。

特定非営利活動（NPO）法人 福祉オンブズおかやま

第 8 回オンライン定時総会と記念講演のご案内

特定非営利活動（NPO）法人として、第 8 回定時総会を下記の日程にて予定をしております。

今回は、新型コロナウイルス感染予防を期しつつ、少人数でも臨場感のある参加が可能になるよう、オンラインで一般会員が参加できる形の定時総会開催といたします。オンライン環境が整っていない会員の方々には心苦しく存じますが、ご理解ご容赦のほどお願い申し上げます。

オンライン参加が難しい場合は、参加方法は昨年度と同じです。「定時総会 議案書」をお読みいただき、「書面表決書」にて各議案に賛否表明のうえ同封の返送用封筒でご返送ください。表決書提出にてご出席に代えさせていただきます。

ZOOM を利用可能な方は、オンラインで定時総会および記念講演会にご出席いただけます。そのように準備、手配を進めております。可能な方はぜひ、オンライン参加をお試し願います。ZOOM アプリのインストール、ZOOM アプリを実際に開いての参加のいずれも、基本は画面の指示に従っていけばできます。ぜひ、チャレンジしてみてください。

オンラインでの出席者数と「書面表決書」提出数の合計で、会員総数の過半数が総会成立のため必要です。何卒ご協力よろしくお願いたします。

記念講演もオンラインで開催し、オンラインに果敢に挑戦して社会活動を広げ、発信し続けている糸山智栄さんのお話を聞きます。前例のない環境での運営で会員の皆さままで戸惑われる方もあると思いますが、なにとぞよろしくお願いたします。

記

日時：2021 年 5 月 30 日（日）

- ・総会 10 時 00 分～ 11 時 00 分
- ・記念講演 11 時 10 分～ 12 時 40 分

『その時、どう動いたか—無理なく効果的な「社会活動のコツ」』

講師：糸山智栄さん（特定非営利活動法人フードバンク岡山 理事長）

※ ZOOM アプリの立ち上げと「参加」手続きに 10 ないし 15 分程度かかると考えられますので早めにご準備ください。開始 15 分前から参加できるように「開場」準備をします。

場所：オンライン

議案：

1. 2020 年度 活動報告
2. 2020 年度 決算
3. 2021 年度 活動方針（案）
4. 2021 年度 予算（案）

報告： 理事の異動について

以上

オンライン記念講演のご案内

『その時、どう動いたか—無理なく効果的な「社会活動のコツ」』

講師：糸山 智栄 さん（特定非営利活動法人フードバンク岡山 理事長）

日時：2021年5月30日（土）11時10分～12時40分

場所：ZOOM（オンライン上の講演会になります）

※ZOOMを約15分前から開きます。入室時には、マイクオフ（ミュート）をお願いします。

参加定員：なし 参加費：無料

今回の記念講演は、オンライン（ZOOM）にて行います。コロナ禍と呼ばれる苦難の時代も2年目に入ってしまいました。感染拡大対策として、定時総会と併せてこの方法をとらせていただきました。

今回の講師である糸山さんは、早々にオンラインによるイベント開催に力を入れていました。フードバンクだけでなく、学童保育と作業療法士のコラボを実践するなど、ユニークで、アクティブな社会活動を続けてこられました。その社会活動のコツをお話しいたします。私たちの活動をさらに大きくしていくうえで、素晴らしい学びがあると思います。

■ 講師からのメッセージ：

市民活動が好きで、目の前に現れたテーマに取り組みながら、暮らしています。SNSやオンラインもせっせと使いながら、ひらめきとたくさんの方のつながりの中で、課題の解決を目指しています。

今回は特に、2018年の西日本水害の時、2020年の新型コロナウイルス感染症拡大の中、フードバンクとして、学童保育連絡協議会として、何を考え、どう動いたかをお話します。使える部分をうまく生かして使っていただければと思います。

■ 講師略歴：

1964年赤磐市生まれ。大学にて「子ども劇場」に出会い専従事務員として就職。子育てを通じ、制度として整っていない学童保育に出会い、保護者OBとして改善に取り組む。失業後ヘルパー資格を取得し、市民活動をしながら働き、女性支援のNPO法人で起業。その後もフードバンク岡山、オレンジハートなどのNPO法人を設立し、各種制度の間で困っている人の支援を行っている。株式会社くぼ取締役、NPO法人フードバンク岡山理事長、NPO法人オレンジハート理事長、岡山県学童保育連絡協議会会長

■ 申込方法：

「オンライン記念講演」参加希望の方はメールにて法人宛てお申し込みください。

折り返し記念講演のURLとミーティングIDおよびパスワードを返信いたします。

E-mail：f.ombuds.okayama@gmail.com

メールで送られる際、必要事項（①氏名・②住所・③電話番号・④当法人の会員か非会員か）を記入ください。

※電話の場合は、毎週日曜日10時～15時までお電話ください。

TEL：080-2885 - 4322（相談ダイヤル兼）

※申込締切：5月28日（木）までにご連絡ください。